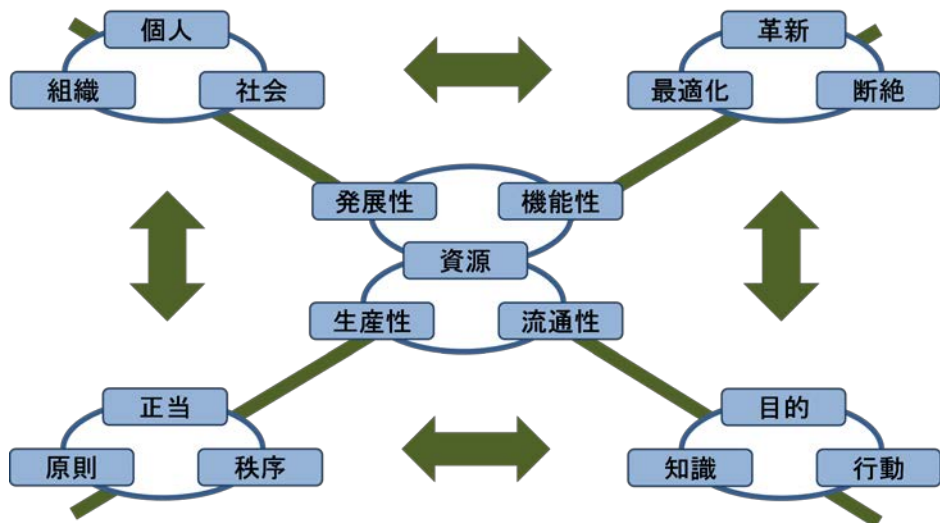


思考と行動の最適化とバランスを図ろう



3つを一組にした4つの輪と中央の5つの輪に表された17の単語群は、仕事のキーワードである。5組の輪は常にバランスを取る必要がある。組織の状態、戦略に応じて、集中するところが変わってくる。マネジメントの前提として、個人と組織と社会のバランスを図るのは重要である。

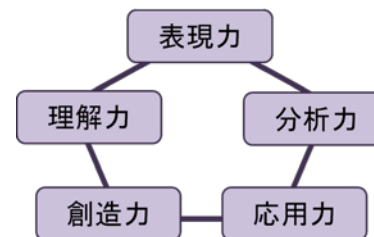
5組の輪は能力を発揮させる対象であり、目的である。

人はそれぞれ、知識をもっている。その知識を如何なる方向、如何なる考え方を持って使ってもらうかが大切である。考え方と方向と成すべき目的を示し、若干の方法を見せれば、自らの進め方を見出し出してくる。仕事で成果を出していく自らの方法を見つけるはずである。

「能力を発揮せよ」だけではそれぞれが発揮するのも難しく、評価するのも難しい。企業活動の中心には、資源の集中、生産性の向上と最適化、流通及び流通チャンネルの最適化がある。生産されたモノが発展性と機能性を社会で発揮されなければならない。資源を開発し、活用し、有益なモノに変えるために、上図右下の「目的と知識と行動」を明確し、バランスを取らねばならない。成果を積み上げて、上図右上「革新と最適化と断絶」を知覚しなければならない。革新には断絶が伴い、革新には社会への最適化が欠かせない。中央の5つ輪と右上下の2つの輪が現れなければならない。これらのミスを防ぐために、左上下の2つの輪がある。

業種、職種によって、具体化する内容は異なる。もっている知識の組み合わせも違ってくる。企業が製品やサービスに特異性を発揮するのは、これらによって行われているはずである。企業が独自の唯一の卓越性を発揮できるのも5つの輪の明確さバランスである。

能力を最大限に発揮する

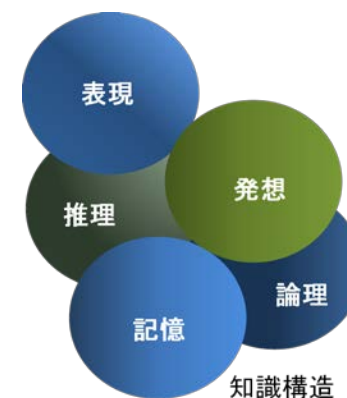


人の基本能力かつ普遍能力は5つである。これらの能力が発達し充実すれば、大半の業務は解決するはずである。他に様々な能力があげられているが、5つの能力が基本要素として組み込まれている。

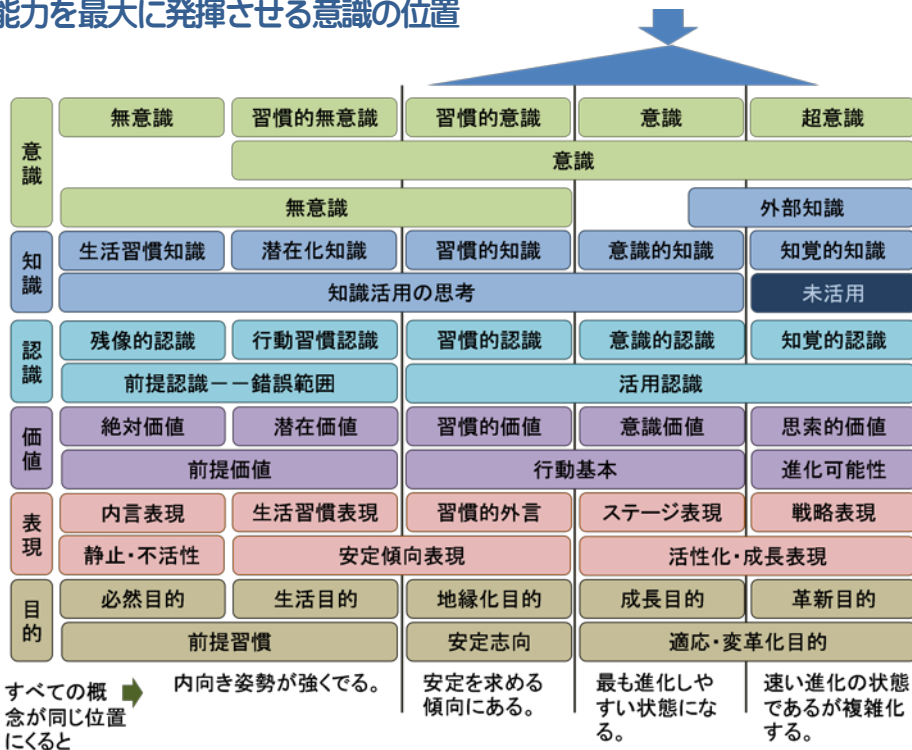
人材の得意を発見するとき、課題に応じての5つ能力を明らかにすれば良い。プロジェクトなどのチームを編成するとき、メンバー全体の5つの能力が最適化&最大化すれば成果が確実になるはずである。

知識は、自らの中で、体系化し、構造化し、機能化させる。機能化させるところまで、自身の中で醸造できて、知識が活用できる。その要素が右図の5つで構成される。

生活習慣、地域文化、環境から様々な記憶が積みあげられていく。記憶された材料を参考にしながら、科学の要素—論理が組み込まれて体系化されていく。環境や社会観察、仕事の役割、目的から、推理、発想へと展開されて機能化される。そして、表現行動になって知識が結実される。機能化された知識が完成する。



能力を最大に発揮させる意識の位置



意識は5段階に分類される。上図に表したように、無意識、習慣的無意識、習慣的意識、意識、超意識（知覚的意識）である。知識から目的に関わる事柄も5つに分類される。目的が無意識に達成されるはずはない。常に求められている成果を知覚して、知識を活用しなければならない。意識から目的に至るまで、「意識」の位置にあり、全体のバランスが取れているのが最も良い。

人材能力は、組織で仕掛けられ、育てられ、試される

成果をあげ続け、成長のために組織の特異とする。

知識を機能化させる。意識できる状態におく。仕事の成果のための3つ輪、これらは人材自身に積み上げられる。それぞれについての知識を持ってもらう。そのように常に仕向けるシステムを検討する必要がある。

裏面に示した「思考と行動の最適化とバランスを図ろう」で示した17のキーワード群は組織活動の方向性の要素となっているはずである。人材に提示し、意味と成果の形を示していくだけでも、組織の卓越性が現れるはずである。

成果をあげるための3つ輪

第一の輪 マーケティング、オペレーション、アカウントティング

如何なる職種であっても、マーケティング、オペレーション、アカウントティングの3つに対して意識しなければならない。マーケティング意識を欠いては自らの仕事の始まりと終わり、継続と進化はない。その第1の自問が「今、自分は何をすべきか」である。オペレーションは日常業務ととらえ、活動の基準になる。「仕事の目的は何か」も問わなければいけない。アカウントティングが専門職でなくとも、効率は考えなければならない。コストの適正化、最小化、利益の最大化、資源の最適活用、生産性を忘れてはならない。知識を持って仕事をしている者は、知識活用の意味を理解せずして効果をあげられない。自分すらも活かしきれない。3つを意識し、計画し、実践しなければならない。

第二の輪 知識流、技術流、情報流

知識の相互支援、関連知識の相互支援、異分野知識の相関と相反があつて自らの知識が活用される。知識活用の最適化である。技術は知識と同じで単独では普及されるはずもない。知識は伝達されなければ消える。知識は活性化しなければならない。技術もそうだ。活性化し進化する。その中心にあるのが情報流である。知識・技術に関わる情報ではなく、何が起きているか、何が事件となるかの情報である。自らを活かすために、自らの組織が発展するために、組織が社会で機能するために、知識流、技術流、情報流が整備され円滑に活用されていなければならない。

第三の輪 コミュニケーション、コラボレーション、エデュケーション

仕事を進める時、コミュニケーション、コラボレーション、エデュケーションがセットになって動いている。一人で最初から最後まで成し遂げることなどできるはずもない。常にコラボレーションで成り立っている。知識・技術を持って仕事をすれば、自分だけの知識・技術で完結する仕事などは存在しない。コミュニケーションは、仲間だけの問題ではなく、他部門、顧客、他企業、大きくは社会ともコミュニケーションをとっている。コミュニケーションが相互の概念形成、そして、相互関与であることを意識しなければならない。自らの知識と経験を他の知識と経験と組み合わせ、組織目的に転換する。成果として形にする。成果を創り出して仕事が完結する。その教育が必然になる。

